

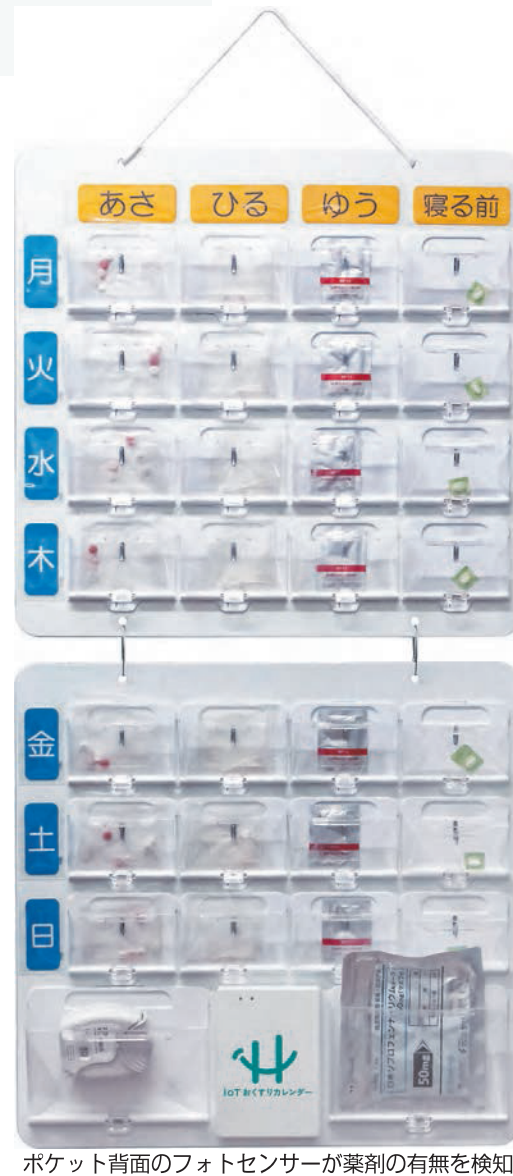
# ネットを介し服薬状況把握

画面左側のメニューには「患者情報管理」「患者担当管理」「患者前編デバイス管理」「継続用デバイス管理」「ポケット設定」「継続情報管理」「継続所属アカウント管理」「アカウント管理」が並ぶ。中央には「タイムライン」があり、患者ID、患者名、カレンダー名、ポケット、日時、行動、アラートが記載されたリストが表示されている。右側には「月間ポケット」の概要と「月曜日・昼食後ポケット履歴」の詳細が確認できる。

# 単3乾電池4本で 約6カ月の連続使用

PCのウェブアプリと連動し、リアルタイムで医療従事者のもとへ情報が届く

## H&H CONNECT IoTおくすりカレンダー



ポケット背面のフォトセンサーが薬剤の有無を検知



病院薬剤師らが約3年前に創業し、医療データ事業を手がけるH&H CONNECTは、従来のお薬カレンダーの形状と使用感を継承しつつ、医療従事者がインターネットを介してリアルタイムで患者の服薬状況を把握できる「IoTおくすりカレンダー」を開発。今夏から医療機関に向けて本格的に発売を開始する。

サブスクリプション形式で、医療従事者向けに月額2500円(月額税込み)750円(で販売予定(取付時))。カレンダーの薬剤を出し入れすると、PCのウェブアプリと連動し、リアルタイムで医療従事者のもとへ情報が届く

仕組みになっている。ポケットの背面にあるフォトセンサーで検知しており、「いつどこに薬剤をセットしたか」「いつどここの薬剤を取り出したか」「何回取り出したか(頓用薬など)」がアプリ上に記録される。服薬状況を医療従事者が把握することで、患者アセスメントがしやすくなり、与薬・服薬の問題にいち早く気付けるようになるほか、複数患者を一括管理できるため、医療従事者間での情報連携が取りやすくなることも期待される。

開発に携わった同社取締役の佐古卓人氏は、12年間臨床の病院薬剤師として勤務経験があることを生かし、「操作の煩雑さや従来のお薬カレンダーとの形状の違いによる運用のしにくさを排除し、現実的に運用できることを目指した」と話す。実際、通常のお薬カレンダーを使用する場合と使い勝手は変わらない。

電池で動作可能とすることで設置場所を問わずに使えるほか、配線コードに患者がつかまらず転倒事故につながるリスクも減らした。単3乾電池4本で、約6カ月の連続使用が可能である。

また、薬剤を入れる場所には手前に引くポケットを採用することで、一包化薬、PTP、テープ剤のほか、ゼリー剤やスティック包装薬などの少しサイズの大きく幅のある薬剤など多様な剤形に対応可能。頓用薬や外用剤(湿布薬、吸入薬、点眼薬など)を入れることのできる大きめのポケットも二つ付いている。

現在、スマホアプリを開発中で、より手軽に情報収集ができるツールを目指している。